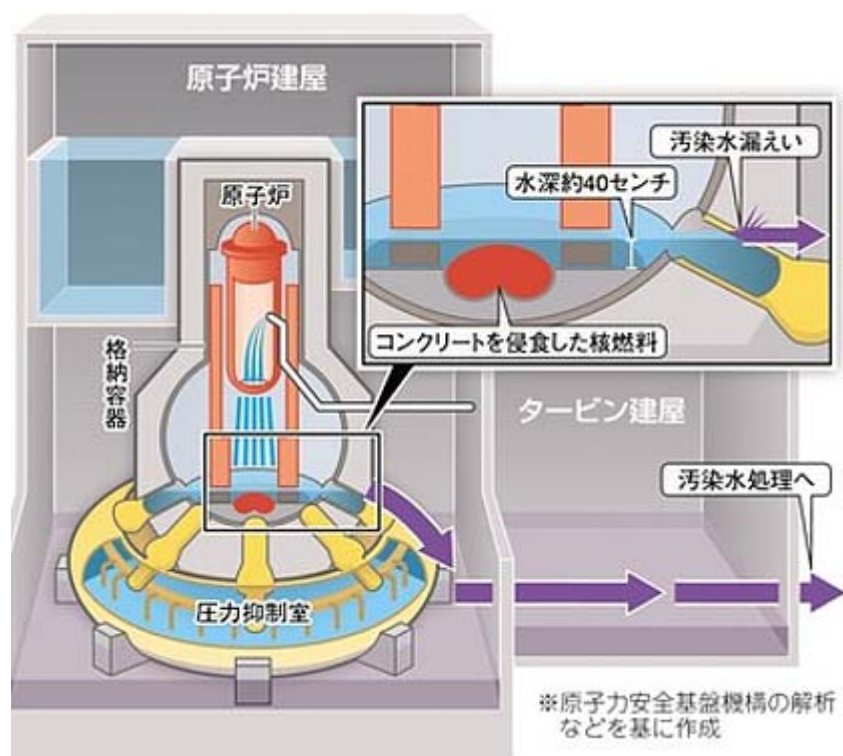


1号機「水位40センチ」 格納容器下部に穴 漏水か

東京電力福島第1原発1号機には毎時6トン前後の冷却水が注入されているのに、格納容器内の水位はわずか40センチほどしかない可能性が、原子力安全基盤機構（JNES）の解析で分かった。2号機の水位は約60センチしかないことが実測で判明しており、格納容器損傷の深刻さをあらためてうかがわせた。

解析は、注水量や格納容器への窒素の注入量と、格納容器内の圧力変化の関係を調べ、どこにどれくらいの損傷があれば、変化をうまく説明できるか探る手法を使った。

その結果、格納容器本体と下部の圧力抑制室をつなぐ配管周辺に直径数センチの穴が開いている - 穴の場所は、格納容器のコンクリート床面から約四十センチの高さで、穴から大量に水が漏れ、水はそれより上にはない - との結論になった。



漏れた水は、原子炉建屋地下に流れた後、配管やケーブルなどを通す穴を通じ、隣接するタービン建屋地下に流れ込んでいるとみられている。東電は1号機の格納容器の水位は約1.8メートルあると推定しているが、それより大幅に低い。

格納容器の厚みは3センチほどあるが、穴があるとみられる配管（直径1.75メートル）の厚みは7.5ミリと4分の1程度しかない。専門家からは、配管は構造的に弱いとの指摘が出ていた。

溶け落ちた核燃料が完全に水に漬かっていないことも懸念されるが、JNESの担当者は「格納容器内の温度は30度程度と高くはない。水に漬かって冷やされているとみられる」と指摘する。

廃炉を実現するためには、格納容器の損傷部を補修し、圧力容器ごと水没させる水棺にすることが必要。担当者は「解析結果は損傷部の特定に役立つ。今後はカメラによる実測も検討しなければならない」と話した。

東京電力からのお知らせ

1/2/3号機の格納容器底部には水が溜まっており、格納容器内部が十分冷却されています

平成24年5月25日更新

以前より公表しておりますが、各号機の原子炉へ注入した水は、格納容器内に流出し、さらに格納容器から原子炉建屋へ、原子炉建屋からタービン建屋へ漏えいしています。東京電力では、タービン建屋から漏えい水を回収し、放射性物質や塩分などを除去した上で再度原子炉へ注水し、格納容器内部の温度を約30～60に維持しております。

なお、5月22日付東京新聞に「1号機 水位40センチ 格納容器下部に穴 漏水か」との記事がありますが、東京電力では、1/2/3号機の格納容器底部の水位(水深)について、現在のところ以下のとおりと考えています。

1号機：約2m(圧力計指示値からの換算値)

2号機：約60cm(工業用内視鏡を格納容器内部に挿入して、工業用内視鏡が水面に届くまでの長さからの換算値)

3号機：約5m(圧力計指示値からの換算値)

東京電力からのお知らせ

新聞、テレビ、インターネットなどで取り上げられている話題について、東京電力から解説いたします。

1/2/3号機の格納容器底部には水が溜まっており、格納容器内部が十分冷却されています

平成24年5月25日更新

以前より公表しておりますが、各号機の原子炉へ注入した水は、格納容器内に流出し、さらに格納容器から原子炉建屋へ、原子炉建屋からタービン建屋へ漏えいしています。東京電力では、タービン建屋から漏えい水を回収し、放射性物質や塩分などを除去した上で再度原子炉へ注水し、格納容器内部の温度を約30℃～60℃に維持しております。

なお、5月22日付東京新聞に「1号機 水位40センチ 格納容器下部に穴 漏水か」との記事がありますが、東京電力では、1/2/3号機の格納容器底部の水位(水深)について、現在のところ以下のとおりと考えています。

1号機：約2m(圧力計指示値からの換算値)

2号機：約60cm(工業用内視鏡を格納容器内部に挿入して、工業用内視鏡が水面に届くまでの長さからの換算値)

3号機：約5m(圧力計指示値からの換算値)

